

(姫野貴之)

慶應義塾大学総合政策学部

2005 年度卒業論文

戦後日本社会の中の新日本文学

松成亮太

学籍番号 70208141

・目次

序論

- 主題
- 仮説
- 研究対象
- 研究手法
- 先行研究
- 意義と限界

本論

第1章 敗戦からの40年代

- 1-1.新日本文学会の結成
- 1-2.民主主義文学の始まり
- 1-3.日本共産党の再出発
- 1-4.40年代の歩み
 - 1-4-1.1946年から1947年にかけて、戦争責任追及
 - 1-4-2.1948年から1949年にかけて、『勤労者文学』
 - 1-4-3.40年代の総括
- 1-5.章末注釈

第2章 50年代

- 2-1.50年問題から第6回大会まで
 - 2-1-1.1950年前後の情勢
 - 2-1-2.『人民文学』の誕生
 - 2-1-3.第6回大会
- 2-2.第7回大会まで
 - 2-2-1.増刷計画
 - 2-2-2.再編・再組織問題
 - 2-2-3.大西・宮本論争
 - 2-2-4.第7回大会とその帰結
- 2-3.50年代後半
 - 2-3-1.新しい動き
 - 2-3-2.第8回大会
 - 2-3-3.第9回大会そして安保闘争へ
- 2-4.章末注釈

第3章 60年代とそれ以降

3-1. 安保闘争から第10回大会まで

3-2. 決別の第11回大会へ

3-3. 「自立」のあとで

3-4. インタビュー

3-5. 結論

3-6. 章末注釈

3-7. 参考文献

序論

*主題

この論文が主題とするのは文学団体「新日本文学会」である。日本敗戦の年である 1945 年 12 月 30 日に新日本文学会は創立大会を行った。1946 年 1 月には雑誌『新日本文学』を創刊準備号として、3 月からは雑誌『新日本文学』を発行した。それから約 60 年の歳月が経過し、2004 年に雑誌『新日本文学』は廃刊となり、翌年の 2005 年 3 月に新日本文学会は解散式を行い、その歴史を終えた。

戦後の文学運動の一翼を担った新日本文学会が最初に掲げた理念は「民主主義文学の発展と普及」であった。もともと新日本文学会の創立発起人となったのは戦前のプロレタリア文学運動の担い手であり、彼らは戦後の運動後継者だった。そして敗戦当初に運動の理論的な根拠を提出したのも彼らであり、彼らの依拠していたのが戦後に活動を再開した日本共産党による方針であった。

しかし後に述べるように日本共産党と新日本文学会は対立を繰り返し、60 年代に絶縁状態に入った。その中で新日本文学会が抱えた問題が「政治と文学」だった。新日本文学会は葛藤の末に衰退に至った。本論文では新日本文学会が日本共産党と決別して独自の道を歩みだす 60 年代半ばまでを描く。

*作業仮説

新日本文学会が掲げた「民主主義文学」という言葉は曖昧さを含んでいた。会の発足当初は蔵原惟人に代表される戦前からの非転向共産党員によってそれはある程度の理論的根拠を持った。しかし共産党との関係がこじれるにつれて「民主主義文学」は正統性を失っていく。いわば「人民を広く結集するための文学」であるはずの民主主義文学は「非民主的ではない」文学であるために他者と自己とを区別する用語として用いられた。

共産党という他者との対決が進展することは「政治と文学」の闘争に決着をつけるのに役立ったと同時により大きな状況把握を誤ったのではないだろうか。つまり「(革命のための) 政治」との格闘という小状況に拘泥するうちに保守政党の優位や社会の多様化という大状況(政治)を見失っていったのではないだろうか。このことが「人民を結集する」はずだった団体が大衆とも切れて衰退していく原因となったのではないだろうか。

*研究対象

本研究の対象としては文学団体「新日本文学会」およびその関係者に焦点をあてる。叙述にあたっては新日本文学会と関係のあった日本共産党や対立した団体も対象に含めるも

のとする。

研究対象を扱う期間は団体の戦後 60 年史全般というよりは戦後の会結成から 60 年代半ばまでを主要な範囲とする。70 年代以降は補助的記述として軽く書き添えるものとする。

* 研究手法

研究の方法としては主に文献調査が中心になる。機関紙や団体関係者の回想録や著作を主に用いる。

* 先行研究

先行研究としては以下の作品があげられる。

- ・ 編集代表鎌田慧 『「新日本文学」の 60 年』(七つの森書館、2005 年)

『新日本文学』最後の編集長を務めた鎌田慧氏による論集。かつて創刊準備号から廃刊号までの『新日本文学』に掲載された重要な作品を収録してある。作品そのものが収録されているので団体の歴史それ自体を分析したものではない。ただし最終部分においては解散に臨む関係者の現在からの回想が述べられており、当時を振るかえる貴重な資料となっている。

- ・ 新日本文学会編 『文学運動における創造と批評』(芳賀書店、1966 年)

1966 年に行われた新日本文学会第 12 回大会の記録を会自らが編纂したもの。当時から総括した団体の二十年史や大会に臨んだ関係者の問題意識がうかがえる作品である。

- ・ 窪田精 『文学運動のなかで』(光和堂、1978 年)

新日本文学会に加わり、のちに日本民主主義文学同盟に転じた著者の回想録。60 年代における分裂の過程において新日本文学会と反対の立場に回ったものの側から会への批判が展開されている。

* 意義と限界

本研究の意義としては新日本文学会が結成してから 60 年代半ばまでの歴史を団体が抱えた問題を中心に据えながら発展と衰退としてみていく点である。限界としては大会記録を中心に描くことになってしまうので地方支部における運動や状況が把握できないこと、また資料として文献記録に偏りがちであることが挙げられる。

本論

第1章 敗戦からの40年代

1-1.新日本文学会の結成

新日本文学会の結成は1945年に始まる。その年の11月15日に発起人が集まり、会創立の趣意、綱領および規約が草案の形で決定された。以下が創立の趣意および規約である。

「新日本文学会創立の趣意」

十数年にわたって日本帝国の侵略的戦争を指導して来たわが国の軍国主義者たちは、その反動的・反文化的支配を強化するためにすべての進歩的文学者に暴圧を加え、わが日本文学の民主的伝統を根底より破壊し去ろうとした。わが作家達はその自主的活動の自由を奪われ、わが国の文学は最も重大な危機に直面するに至った。

然るにこれらの軍・官・財閥は、連合国軍の攻撃の前に敗退し、ここに自由な文学のためのいはば外的社会的条件が与えられた。今こそ日本の文学者は、わが人民大衆の生活的現実・文化的欲求の真実の表現者として、日本文学の中に存在し続けてきた民主主義的伝統の上に立ち過去の日本文学の遺産の価値高きものを継承し先進民主主義国の文学より学びつつ真に民主的、真に芸術的な文学を創造し、日本文学の高き正しき発展のために結合してその全力を傾けねばならぬ。

「新日本文学会の綱領」(草案)

- 一. 民主主義的文学の創造と普及
- 二. 人民大衆の創造的・文学的エネルギーの昂揚と結集
- 三. 反動的文学・文化との闘争
- 四. 進歩的文学活動の完全な自由の獲得
- 五. 国の内外における進歩的文学、文化運動との連絡協同

(1946年1月創刊準備号)

創立準備会の発起人として名を連ねているのは秋田雨雀、江口渙、蔵原惟人、窪川鶴次郎、壺井繁治、徳永直、中野重治、藤森成吉、宮本百合子の9人である。そして賛助員として志賀直哉、野上弥生子、広津和郎の名が加えられている。

続いて同年の12月30日に東京神田の教育会館にて新日本文学会創立大会が行われることになった。入会申し込み者は173人、創立大会に出席したのは100名とされている。1大会にては江口が議長に選出された。彼はこの会の創立にあたって小林多喜二をはじめと

する民主主義文学運動の同志が弾圧されたり、集会が解散させられた事に触れ、「(新日本文学) 会はプロレタリア団体の単なる復活ではない。新たな民主主義革命の進展に応じて、一切の民主主義文学者の結集を図り、民主主義文学の前進のために闘うものでなければならぬ」と強調した。²

江口はこの団体がプロレタリア団体の単なる復活ではない、と強調していても先に述べた 9 人の創立発起人の経歴を考えれば分かるように彼らのほとんどが戦前のプロレタリア文学運動の関係者であった。³彼らが創立発起人となった資格としては中野重治による大会報告として「帝国主義戦争に協力せずこれに抵抗した文学者」であることが条件とされた。以後、彼らを中心として会員が集結することになる。なお多くの文学者を「民主主義文学」の旗印のもとに結集するべく阿部知二に招請状を送ったり、先に述べた志賀や野上、広津のほかにも正宗白鳥や宇野浩二、室生犀星らを本人の承諾を得た上で賛助会員として決定することになった。⁴

彼らは以下のような宣言を発表して大会を閉会する。

「宣言」

われわれは今日、日本における民主主義的文学運動組織のために集まった。われわれは、日本における民主主義的文学の創造とその普及、人民大衆の創造的・文学的エネルギーの昂揚とその結集とを自己の任務として自覚し、この任務達成のための基本組織とその活動方針とを決定した。われわれはこの方針を具体化、この具体化におけるわれわれの献身を以て日本の全人民に答へ、同時に全世界の人民、特に中国および朝鮮の人民に答へようとするものである。

1945 年 12 月 30 日

新日本文学会

以上のようないきさつを経て 1946 年 1 月から雑誌『新日本文学』創刊準備号、3 月に創刊号が発行されるようになった（この年は 4 月に第 2 号、6 月に第 3 号、8 月に第 4 号、10 月に第 5 号、そして翌年の 5 月に第 6 号が発行されることになる）。

1-2. 民主主義文学の始まり

では新日本文学会が提唱した「民主主義文学」とはいかなるものだったのだろうか。まず発起人として戦後に第一声をあげた宮本百合子から見てみることにする。

宮本百合子は『新日本文学』創刊準備号に『歌声よ、おこれ』⁵ という文章を発表した。

この文章は副題に「新日本文学会の由来」とあるようにこれから展開されるべき文学運動の理念を表明したものと見える。彼女は敗戦を迎えた当時の日本に対して本格的に民主主義が民衆の中に根をおろすべきものとして立ち現れているととらえた。敗戦によってそれまでの権威が崩壊し、なお混乱を深めつつある転換期に未来への展望を提示するものとして文学が改めて求められている。

日本において文学の発展は明治以降、封建的要素の残滓により個人主義が未成熟なままであり、社会性が歪められた状態で進んできた。このことが日本文学の中にある反動性として権力による弾圧に抵抗しえなかったとする。第二次世界大戦がもたらした惨禍において作家の多くは「自己と文学との歴史的展開のモメントを捉え切れなかった」がゆえに新しい文学の発展をつかみ損ねたのである。

その原因は「個性と文学の発展の可能の源泉として、日本の民主主義文学の伝統が、積年の苦難を通して絶えず闡明して来た文学における客観的な社会性の意義を会得していなかったからである。文学において謙虚に又強固に自己を大衆のなかなるものとして拡大しておかなかった故である」。それゆえにこのことを踏まえて戦後における文学の再出発として民主主義文学は開始されなければならない。

では民主主義文学というのはどういうことかという「民主なる文学ということは、私たち一人一人が、社会と自分との歴史のより事理に叶った発展のために献身し世界歴史の必然な動きを胡魔化することなく映しかえして生きてゆくその歌声という以外の意味ではないと思う」ものと彼女によって位置付けられるのである。「言葉にあらわしきれない未来への翔望」を胸に秘めた作家たちによって社会におけるさまざまな人間の声を誘い出して「新しい日本の豊富にして雄大な人民の合唱」にしていかなければならない。そして雑誌『新日本文学』は民主主義文学の砦として創刊されるのだ、と彼女は文章を結んでいる。⁶

日本文学の現状とこれからの展望に対して、宮本が投げかけた理念に理論的下地を提供したのが蔵原惟人である。

蔵原は1946年の『新日本文学』創刊号に『新日本文学の社会的基礎』⁷という文章を寄稿し、それにおいて日本の敗戦を大化の改新、鎌倉幕府創設、明治維新よりも根本的な日本史上における変革として位置づけた。彼は日本における民主主義社会の建設を民族的課題として考え、それを政治と社会の問題にとどまらない文化の問題でもあるとした。

民主主義社会の建設のために新しい文学の創造が要求されることになり、社会建設のための積極的協力が求められる。つまり「文学は民主主義的な社会の建設に協力することによって始めて民主主義的な文学になり得る」のである。ではこの民主主義的な文学は歴史上におけるどのような位置づけにあるのか。

蔵原によると明治維新は不徹底な民主主義革命であり、封建的な残存物を社会変革の後にも内包するものであった。それゆえに文学もその悪弊を免れることができずに社会変革のために闘争する文学者自身が半封建的な歴史的環境から出現したという条件ゆえに戦い

きることができなかった。こうした事態は地主、資本家の上に成立する絶対主義的官僚国家とその基礎をなす半封建的社会関係が日本に存在していたという問題に還元される。

半封建的社会の遺制を残した日本が終局的に目指す社会とは「働く民衆の生活と文化の向上のための社会」でなければならない。敗戦によってこれから建設されるべき民主主義的社会は「資本主義から社会主義への発展を可能ならしめる」ようなものではなくてはならないのである。それゆえに創造される民主主義文学もそのような社会に適応、助成するものでなくてはならない。民主主義文学の創造には市民、農民、労働者という三つの構成部分が担い手となり、特に労働者が以前のプロレタリア文学の継承発展として中核的役割を担わねばならない。

ただし、戦前のプロレタリア文学に比べて民主主義文学はより建設的で広範な主題や内容を扱うものとする。三つの構成部分が混在し、「一定の指導の下に結束して封建的、ファッショ的な反動文学および文化と闘争し、新しい民主主義社会の建設により、それらは次第に一体となって将来の社会主義的文学の飛躍発展の道を進んでゆく」という展望がこのようにして提示されたのであった。(傍点、筆者)

以上のような理論が蔵原惟人によって提示された。この考え方を文学から見ると文学は政治や社会関係を反映するものであり、(革命を志向する)政治の指導におかれるものという解釈が行われるのであり、歴史解釈から見ると日本共産党が掲げていた32年テーゼ8を踏まえたものである。

宮本が提唱したのは人民の声を結集するといういわば漠然としたものであったのに対して蔵原の理論は共産党の思想が色濃く反映されたものだった。宮本の理念からは「民主主義文学」についての多様な解釈の幅が残されているのに対して蔵原の理論は、文学の展望に明晰さを増すものではあったものの解釈を狭める弱点を持っていたともいえる。『新日本文学』最後の編集長を務めた鎌田慧は解散記念講演会において発足当初の理念を次のように語る。

(「歌声よ、おこれ」というのは)「全く新しい社会各面の人々の心の声を誘い出して」、雑誌を創っていこうっていう精神でして…新日本文学をつくる先輩たちの初心といいますか、想いだったと思います。

…中野(重治)さんは「書け、その堰を切って落とせ」と書いています。これは、「小説を書けない小説家」だったのが、敗戦になって新しい時代をむかえ、ようやく書けるようになった、そういう風な想いをこめて「堰をきって書け」と書いたのでしょう。

…新日本文学会は戦後すぐ出発したとはいっても、たんに雑誌を創刊するっていうんじゃなくて、新しい民主主義の国を創っていくんだという、それを文学ではたしていこうっていう、そういう熱望があったと思います。

蔵原惟人さんが最初の編集長をやっていますけれど、彼の規定の仕方は「封建時代を超えて民主主義」に行くという歴史観で編集するといっていますが、戦後になって、封建制度

から近代国家にむかう、そういうふうなところに文学運動の意図があったんじゃないで、戦後民主主義革命を徹底していこう、社会を徹底的に変えていこうという、そういう想いや声を全国から集めてやっていこうというのが大方の気持ちだったと解釈しています。まあそれが中野重治さんとか第二期の編集長の壺井繁治さんとかの創成期だったと思います。

9

今日から見た発足当初の理念は鎌田によって上のように解釈されるが、蔵原や宮本をはじめ新日本文学会が発足にあたってそこに集結した中心人物は戦前の旧作家同盟の系譜に位置する作家だった。彼らにとって戦後に獄中から颯爽と登場した日本共産党は輝かしい権威を背負った存在であり、無視すべからざる団体だった。当然に会はその理論的にも大きな影響下にあった。それでは次の節では出獄、再建された日本共産党の敗戦直後の活動を見てみることにする。

1-3. 日本共産党の再出発

敗戦によって日本は米国を主力とする連合軍の占領下に置かれることになった。1945年10月にGHQ（連合軍総司令部）の指令によって政治犯が釈放された。そのために獄中にいた日本共産党の幹部である徳田球一や志賀義男らが出獄し、公然と活動を開始した。戦前、戦中を通して獄中非転向を通じた彼らは節を曲げなかった人々として絶大な権威を背負って戦後日本社会に立ち現れることになった。翌年1946年の1月には亡命先の中国の延安から野坂参三が帰国し、2月に共産党は第5回党大会を開き当面の革命への展望を示す大会宣言を採択した。

共産党が革命戦略として理論的に依拠していたのが先述した32年テーゼによる二段階革命論であった。つまり天皇制をまずブルジョワ民主主義革命によって打倒し、ついで社会主義革命に進むという理論である。彼らは自身らを獄中から釈放し、日本民主化の指令を打ち出す占領軍を「解放軍」と規定した。そこで連合軍による占領下において平和的な手段によって民主主義革命を達成することは可能であるという判断がなされ、「平和革命」路線が採用されることになった。

帰国した野坂参三は第二次世界大戦中の抵抗運動である反ファシズム統一戦線を日本で結成することを目指した。また彼は「愛される共産党」を標語に掲げ、戦前における革命運動の暗い印象を払拭して平和的に民主主義革命に邁進することを提唱した。

こうして民主人民戦線という路線が敗戦後の共産党の方針となった。当面の民主主義革命のためには共産主義に賛同するものもそうでないものも幅広く組織可能である必要があった。これを文学の世界に適応したのが民主主義文学の概念であったといえよう。こちらとも同じく共産主義に賛同しなくとも民主主義のスローガンのもとに広範な民衆を結集する

ことが目標であった。新日本文学会の創立にあたって旧プロレタリア文学運動の流れをくむ作家以外にも阿部知二に招請状を送ったり、志賀直哉を賛助会員にしているのはその意図があつてのことである。

発足当初からの新日本文学会の会員であり、のちに幹事会議長を務めた中島健蔵は招請状を受け取った一人である。彼は「無党無派」に徹することを決めていたが、新日本文学会が「共産党員作家を中心とする左翼文学集団」であることは明らかであるが、党員作家の集団という性格を濃くしていくのでなく、民主主義文学者の結集を図り、民主主義文学の前進のために戦うものであれば積極的に参加すべきであると考えていた。¹⁰

政治の世界で民主人民戦線の旗手としての共産党と文学においてその影響のもと民衆を結集する新日本文学会が戦後社会に登場した。それでは民主主義文学にとって出発後の歩みを見てみることにする。

1-4.40年代の歩み

ここでは新日本文学会の創立から40年代末までの歩みを見ていくことにする。

40年代の全体をおおまかに言うと戦後の新たなる出発によって共産党の躍進と呼応して新日本文学会が勢力を拡張した時期であった。組織の発展の一方で内部における問題提起がなされたがそれは過去への反省がうやむやとなったまま事態が進行してしまった感がある。そして50年代半ばになってこの時期に不明確にしていた問題、つまり文学者の戦争責任問題が吉本隆明や武井昭夫といった若い世代によって問い直されることになる。

1-4-1.1946年から1947年にかけて、戦争責任追及

新日本文学会を創立したのは「帝国主義戦争に協力せずこれに抵抗した文学者」であった。これらの人物が創立大会において掲げた組織目標が文学者の戦争責任追及であった。創立大会において責任追及の提案がなされてから1946年3号（6月発行）において小田切秀雄の署名による『文学における戦争責任の追及』¹¹という文章が掲載された。文学における戦争責任は「まず吾等自身の問題」であつて自己批判から始めねばならないものであるが、一億総懺悔というごまかしを許容するものであつてはならない。全員に責任があるということになると最大かつ直接的な責任者の問題がはぐらかされることになる。それゆえにまず会によってその責任者の名を挙げることになった。

戦犯リストとして菊池寛、久米正雄、中村武羅夫、高村光太郎、野口米次郎、西條八十、斎藤瀏、斎藤茂吉、岩田豊雄（獅子文六）、火野葦平、横光利一、河上徹太郎、小林秀雄、亀井勝一郎、保田與重郎、林房雄、浅野晃、中河興一、尾崎士郎、佐藤春夫、武者小路実

篤、戸川貞夫、吉川英治、藤田徳太郎、山田孝雄の 25 名が名指しで掲載されていたのである。

この指名は責任を追及する側における自己批判の可能性も指摘する一方で責任者への激しい断罪的な口調で書かれた文章だった。後述するように新日本文学会がこのような勇み足に出たのは会の発足における足並みの遅れと不統一への焦りがあったと考えられる。しかし責任追及の問題は追及される側の責任もさることながら追及する者の戦争責任問題を喚起することになった。

文芸雑誌『近代文学』12 の同人である平野謙と荒正人を中心に「政治と文学」の問題が論じられた。これは戦前における「政治の優位」への批判的評価を通じて政治と文学の二項対立ではなく、自己の内面に徹する「文学」によって外面においては真に「政治」的な主体の確立を可能にするという主張を持つものであった。

そして平野・荒に対して中野重治が『批評の人間性について』で返答した。(1946 年 4 号 8 月発行)。中野が見るに平野や荒は批評そのものにおいて「非人間的」であり「文学反動」と人間的に戦うことを放棄している。その結果、敗戦によって生じた民主主義革命の展望が再び反革命に押し流されるのを黙認することになってはしないか、という批判が展開された。続く『批評の人間性 (二)』13 は「文学反動の問題など」という副題を持つより厳しい論難となった。ここにおいて中野は戦争責任を追及すべき作家たちが意気阻喪、心理的虚脱に陥り、かえって追及されるはずの戦犯的作家が勢いづいていると断ずる。その原因のひとつは責任問題、いいかえれば転向問題が作家個人の良心の問題という修身的な次元に置き換えられていることにある。中野も「政治と文学」の二元論的すみわけからの脱却を模索していたがそのために戦争責任追及の鋭鋒を下げてはならないとした。宮本百合子も 1947 年における第 3 回大会のあとで『近代文学』の理論に対して民主主義文学運動を盛り上げていくことに貢献することを認めつつも「己の第一歩的な着眼に固執して、千たび万たび、その角度からだけものを言い、またはその着眼のために理論の全体的な把握を失うような習癖」に陥ってはならないと指摘している。(『両輪』14)

戦争責任追及問題に新日本文学会が高圧的な態度をとったのは先に述べたように会の足並みの遅れと不統一が関係していた。足並みの遅れということについては雑誌『近代文学』が発起人わずか 7 名の集団であったにすぎないにもかかわらず敗戦からわずか一ヶ月のうちに構想され、年末の新日本文学会創立大会が行われた神田教育会館にて平野謙と本多秋五が立ち売りの店を開いた。¹⁵ それに対して『新日本文学』は 2 月創刊ということになっていた(『本誌の出来るまで』16)。しかし、それでは遅すぎるということで 1 月に創刊準備号という形で世に現れることになったのである。

またこの戦争責任についての意見が必ずしもはじめから一致していたとは限らない。創刊準備号における見開きには日本文芸家協会の発足を祝う欄『日本文芸家協会生まる』が掲載された。「新協会は、文学者の生活の擁護、その職能上の利益の増大向上一本を目的とする団体である。(略)あらゆる角度から文学者の職業上の利益のために働こうとしてい

る」¹⁷ という好意的に団体を紹介している。しかし、同時にそこには 3 号にて戦犯リストに掲載された菊池寛と河上徹太郎の名が団体役員として掲載されていた。公然と団体を紹介する一方で、すぐ後にその役員の一部を戦犯として名指しするという首尾一貫しない態度に中島健蔵は警戒心を抱いたという。¹⁸

大所帯で出発しながらもなかなか雑誌発刊にこぎつけず、また会の内部で必ずしも意見が統一されてきていたわけではない。このような事情が新日本文学会の幹部に高圧的態度をとらせたのではないだろうか。1947 年 2 月にはゼネストの予定が GHQ の命令によって中止にされ、共産党は占領軍による上からの改革のもとで民主主義革命を達成するという展望を挫かれた。共産党が進路に後退をきたしたのもさることながら新日本文学会も態度を硬化させたのである。

1-4-2.1948 年から 1949 年にかけて、『勤労者文学』

1947 年末の第 3 回大会において徳永直から『勤労者文学の現状について』という提案が出された。彼の意見によると「勤労者階級」の定義は「生産手段を持たずに、雇われて生産に携わる労働者および知識労働者、耕作農民とこれに準ずる学生の総称」をいう。勤労者階級は労働する人民の中でも特別な文学勢力たりうる意識と感覚を持っているので、日本での民主主義文学運動は勤労者文学の発展なくして強力なものにはなりえないと論じた。

19

ただし先の徳永の報告には「勤労者の生活に根ざした一切の文学を含む、その総称」であって勤労者作家とは「主として職場にあって文学を創作する人」のことを言う。より平たく言えば作品の価値よりも労働の現場にいる人間が創作活動をすればそれでよしという中身の薄い、素朴なリアリズムに終わってしまうような弱点を備えていた。

しかし、この徳永提案を受けて 1948 年の 3 月に徳永を編集長として雑誌『勤労者文学』が創刊となった。新日本文学会はこれを受けて 1948 年 7 月の常任中央委員会において創造の実績を持たない「文学活動家」も加入させるという方針を出した。その結果、第 3 回大会から第 4 回大会にかけて会員数は約 500 名から約 930 名²⁰に増大することになった。この背景には各地における支部の増大とサークル活動の普及があった。中央委員会、書記局、そして地方支部を持つ新日本文学会は日本共産党と組織の形態が類似しており、そのことが大衆動員を目指す際に中央から地方への流れを作るのに効果的に作用したといえる。

もうひとつ注目することはこの年の 10 月に行われた第 4 回大会において公然と「ファシズム反対」「民族独立」「平和擁護」²¹ が掲げられたことである。第 4 回大会の大会結語には次のようにある。

われわれの文学は現実の発展から立ち遅れており、日本民主化の革命の要請にまだ十分

に応じていない。

とくに革命の先頭にたっている労働者、農民の生活のための戦いに根ざし、それを発展させるような文学のゆたかな創造こそは、われわれの当面する中心的な課題である。

このような文学を創造するためには、われわれ文学者の勤労大衆との結びつきをさらに飛躍的に強化することが切実な要求となっている。

同時にわれわれは広範な市民、知識層の生活と闘争を反映しその要求にこたえる文学を一層強力におしすすめなければならない。

このようにして全人民的な文学を、新しいファシズムとその文化反動にたいする闘争、民族独立と平和擁護のための闘争のうちに力強く前進せしめねばならない。

1948年10月26日

1948年は3月に成立した芦田均内閣の後の10月に吉田茂内閣が誕生するという保守政権の始まりとなった。占領政策が方向転換を遂げてファシズム的な雰囲気が強まる一方で、共産党は3月に中央委員会で民主民族戦線を提唱、これを受けて5月に新日本文学会中央委員会は「平和のために」²²と題する声明を発表して全ての文学者、文学グループ、および文学サークルに対する反戦のための協力を呼びかけた。新日本文学会による「平和宣言」を経て、第4回大会において先の結語につながったのである。この大会において岩上順一による活動報告として労働者や農民をその他の民主勢力から出現した作家を急速に成長させること、そしてそのためには民主主義文学運動内部での感情や行動の統一を急ぐこと、具体的には中央機関と全国地方支部組織との統一が提唱されていることは重要である。²³『勤労者文学』創刊にみられる大衆動員路線と合わせて中央機関の指導が必要とされたのである。

翌1949年1月の総選挙において共産党は35議席を獲得し、躍進した。新日本文学会も共産党の躍進と呼応するかのように11月の5回大会時には約1500名を獲得していた。²⁴

そうした中で、宮本百合子が『勤労者文学』に対する疑義を呈する。彼女は『その柵は必要か』²⁵という論文で「勤労者」という曖昧な規定を設けて、民主主義文学の主軸とするのは民主主義文学の発展を妨げる「柵」と設けるものでないか、という批判を行った。宮本の批判もあって、この「柵」は不要ということになって雑誌『勤労者文学』は1949年8月に終刊となった。しかし宮本の『勤労者文学』批判はあっても依然として大衆獲得路線は改められることなく、1949年10号に掲載された組織綱領の前書きには会員を支部のあらゆる活動を通じての獲得することが掲げられ、会員の資格は「書いているものと書いていないものとの区別が標準であるかのごとく考えられやすいが会員の資格はこのような区別を標準としていない」として問われないものとされた。²⁶

敗戦から 40 年代はおおむね新日本文学会にとっての躍進の時代であった。しかし同時にこの団体が発展するはずのところを自ら狭めてしまった問題も見逃せない。

新日本文学会が牽引するはずの民主主義文学というのは蔵原惟人が「一定の指導の下に」と書いたものの、戦前のプロレタリア運動を継承発展させたものであるべきだった。いわばそれは歴史的に展開・拡張する概念であり時間的な縦のひろがりこそ求められるべきだった。

しかし元来「民主主義文学」という言葉に含まれる曖昧さが引き金となり、それに反するものがすなわち「文学反動」というレッテルを貼られる対象になった。それは「政治と文学」論争における（新日本文学会会員の）平野謙や荒正人も「文学反動」として名指しされたことを考えると「民主主義文学≠プロレタリア文学」という縦の広がりよりも「民主主義文学≠近代主義」「戦後文学」という横の対立軸を生んでしまった感がある。

さらに「勤労者文学」という提唱によって戦後に出現した多様な文学との間における溝はさらに広がり、より直接的で皮相的な労働者密着の文学に民主主義文学が引き寄せられてしまった。

内側に戦争責任問題、文学概念の硬直化という問題をはらみつつも新日本文学会は戦後を歩き出した。そこを 50 年問題に始まる激動が会を襲うことになる。次の章は 50 年代を見ていくことにする。

1-5. 章末注釈

1、『新日本文学』創刊号、62 ページ

2、前掲、62 ページ

3、蔵原惟人、宮本百合子、中野重治はいずれもプロレタリア作家同盟（ナルプ）出身の作家である。

4、前掲 62 ページ。「日本文学の民主主義的発展に従来貢献した作家」として志賀直哉、広津和郎、野上弥生子、正宗白鳥、上司小剣、室生犀星、谷崎精二、宇野浩二、豊島與志雄の名がある。

5、前掲、1946 年創刊準備号

6、前掲、1946 年創刊準備号、9 ページ

7、前掲、1946 年創刊号、2 ページ

8、1932 年にコミンテルンで採択された「日本の情勢と日本共産党の任務に関する方針書」。日本の支配体制を地主と独占資本、その上に立つ天皇制の三部分から構成されるとしてまずブルジョワ民主主義革命によって天皇制を打倒し、それを社会主義革命に転化するという二段階革命論と規定した。

- 9、鎌田慧編集代表『新日本文学の60年』、i、ii ページ
- 10、中島健蔵『回想の戦後文学』（平凡社、1978年）、105 ページ
- 11、前掲 1946年3号、64 ページ
- 12、荒正人、小田切秀雄、佐々木基一、埴谷雄高、平野謙、本多秋五、山室静の7名が同人となって創刊した文芸雑誌。1964年に終刊となった。
- 13、前掲 1947年6号（5月発行）、2 ページ
- 14、前掲 1948年3号、6 ページ、宮本百合子『両輪』
- 15、本多秋五『物語戦後文学史（上）』、56 ページ
- 16、前掲創刊準備号、10 ページ
- 17、前掲創刊準備号、11 ページ
- 18、中島 前掲 205 ページ
- 19、新日本文学会編『民主主義文学運動 1948年』、33 ページ
- 20、新日本文学会の会員数の変遷は以下のとおりである。

創立大会時（1945年12月） 173名
第2回大会時（1947年10月） 約300名
第3回大会時（1947年11月） 約500名
第4回大会時（1948年11月） 934名
第5回大会時（1949年11月） 1514名
第6回大会時（1952年3月） 1655名
第2回中央委員会（53年2月） 1725名、このときが最大の会員数とされる。
臨時中央委員会（53年7月）
第7回大会時（1955年1月） 684名
第8回大会時（1957年10月） 694名
第9回大会時（1959年11月） 564名
第10回大会時（1961年12月） 577名
第11回大会時（1964年3月） 451名
第12回大会時（1966年4月） 360名
『新日本文学』大会資料および窪田精『文学運動のなかで』（光和堂、1978年）による。

- 21、前掲 1949年1号、2 ページ
- 22、前掲 1948年7号、34 ページ
- 23、前掲 1949年1号、26 ページ
- 24、窪田 前掲 228 ページ
- 25、前掲 1949年6号、26 ページ
- 26、前掲 1949年10号、86 ページ

第2章 50年代

2-1.50年問題から第6回大会まで

2-1-1.1950年前後の情勢

1950年前後は東アジアにおいて冷戦が激化し、社会に緊迫した雰囲気が漂うようになっていた。前年の10月に国共内戦の末に中華人民共和国が建国され、1950年6月25日には朝鮮戦争が勃発した。日本国内では同年6月6日にGHQによる日本共産党の徳田球一ら幹部の公職追放の指令が出され、7月18日には共産党中央機関紙『アカハタ』が停刊処分となった。いわゆるレッドパージの始まりである。朝鮮戦争の勃発に前後して米国は対日講和に積極的に乗り出すことになり、講和問題と再軍備問題が重要な国論として出現してきた。

また1950年は共産党における内紛が発生した年でもあった。1月にコミンフォルム（ヨーロッパ共産党・労働者党情報局）が機関紙に日本共産党の平和革命路線を批判する文章を掲げた。朝鮮戦争前夜において米国との闘争を促すコミンフォルム批判によって党組織は徳田球一を中心とする「所感派」と宮本顕治を中心とする「国際派」に分裂した。平和革命論の提唱者であった野坂参三は自己批判を行い、平和革命論を放棄して党の多数派である所感派に合流した。こうして3月には党中央委員会による「民族の独立のために全人民諸君に訴う」が発表されることになった。共産党の内部分裂は50年問題に始まり、1950年代に半ばまで続いた。この党内の内訌が新日本文学会にも持ち込まれることになる。

2-1-2.『人民文学』の誕生

1950年8月に新日本文学会の会員のもとに「新日本文学会中央グループ」と称する団体から手紙と『声明書』（8月22日発表）¹と題する文書が届けられた。声明書は『党中央に巣くう右翼日和見主義者分派に対するわれわれの態度 党のポリシェビキ的統一のために』と『コミンフォルムの「批判」と党の「所感」についての意見書』の二つから成り、コミンフォルム批判によって平和理論から「所感」に転向した共産党多数派に対する批判が綴られていた。

当時、マッカーサーの指令による公職追放直後において所感派の領袖である徳田球一を中心として党内には臨時中央指導部（臨中）が結成されていた。一方、新日本文学会内部の党員作家は国際派が多数を占め、常任機関に選出されている党員作家グループが「新日本文学会中央グループ」を名乗っていた。所感派への批判が書かれた文章が非党員作家に配布されたことは共産党の内紛がこの団体の内部に波及したことを意味した。²特に先に挙げた文書の前者は末尾に「全党員諸君！全党員文学者・芸術家諸君！わが党のみが芸術の

生命であるところの真実を語ることを怖れない。このことをわれわれは確信する」³とあるように党の文化政策上の問題が新日本文学会の運動の議論に取り上げられることにつながったのである。

そしてついに11月に藤森成吉・江馬^{なかし}修・豊田正子・島田政雄・栗栖継（藤森と江馬は新日本文学会の中央委員でもあった）を編集委員として雑誌『人民文学』が創刊されることになった。雑誌が創刊されるという情報は事前に会に連絡されることがなく、会は10月26日の常任中央委員会で始めてその存在を知ったという。⁴新日本文学会常任中央委員会は11月20日⁵に『「人民文学」に対するわれわれの態度』を発表し、反対意見を表明した。『人民文学』の創刊と配布は「特定の政治的流れに立って、日本の民主主義文学運動の単一組織の分裂」を目的にした悪質な破壊行動として批判を展開した。ここに共産党の内部分裂が民主主義文学の分派闘争として表面化したのである。

『人民文学』との対立が生じたことによって新日本文学会は12月に無党派出身の中島健蔵を組織の顔役である中央委員会議長に立てた。中島は以後、1961年の第10回大会まで中央委員会議長（後に規約改正により「幹事会議長」）を務めることになる。一方、書記長には1949年以来の中野重治が就任する。中野は1962年まで書記長（後に規約改正により「事務局長」）に就任した。こうして中島・中野の体制が成立した。⁶中島は非党員の立場から大衆的組織の幅広い包容力を維持するために努力するべく議長にとどまったと回想するが⁷本人の意志もさることながら非党員文学者を議長に立てることによって共産党との対立の緩衝材にしようとしたと考えられる措置であった。

翌1951年にかけて二団体の対立は激化の度合いを増幅させていった。1月に『人民文学』から徳永と栗栖による『会の方針についての共同提案』が提出されることになった。⁸彼らの提案は新日本文学会が文学創造のための団体であるために「最低限度の共通思想と綱領」をもたねばならないことや勤労者を中心にした文学勢力を主軸とした団体を目指すことや新日本文学会が人民民主主義文学団体として確認されたとき『人民文学』との統一にいたるなどのものであった。かつての『勤労者文学』の提案や中国革命に対する安易な便乗がうかがえる、これらの意見に対して新日本文学会常任中央委員会は『徳永・栗栖提案に即して』⁹を2月に反論として発表、全人民の文学組織であって特定の階級のみ組織でないこと、平和擁護と民族独立を軸とする組織であって、文学面での民主民族戦線であると改めて強調した。

彼らの対立が深まるなかで1月21日における宮本百合子が急死した。彼女は共産党国際派の首領である宮本顕治の妻だったが、宮本顕治が党主流派の敵になったときに彼女へも批判の矛先が向けられることになった。党内において尊敬されていた彼女への評価が一転して非難へと転じることになり、『人民文学』に投書の形式によって宮本百合子を「階級敵」または「ブルジョワ文壇に寄食し、プチブル的生活を維持しつづけることに成功した才能あるペテン師」だといった悪質な誹謗中傷が行われた。¹⁰さらには5月に予定されていた百合子祭へのボイコットが共産党臨時中央委員会から呼びかけられることになり、会から

はそれへの抗議¹¹や民主団体への共同防衛（日本美術会、新演劇人協会、日本帰還者同盟、婦人民主クラブ、全日本学生自治会総連合）の呼びかけ¹²によって組織の防衛を図らねばならなかった。また地方支部にも対立は波及しており、『新日本文学』の配本表が紛失し、そのかわりに『人員文学』の一定部数が案内とともに発送されていたという事件が起きたり、会費の滞納が常習化したり、また配送された雑誌をそのまま焼却するといった妨害行為が起きていた。¹³

対立を收拾するべく新日本文学会常任中央委員会は7月に『民主主義文学運動の統一・強化のために』¹⁴として『人民文学』への統一の呼びかけを行った。これはこの年の9月に予定されていた第6回大会にむけての措置でもあった。大衆団体と政党を混同することなく、民主主義文学運動に対して破壊および分裂行為を行う政治的意見とその分裂主義に対して戦うべきことを呼びかけた提案は「徳永・栗栖提案」への反論に見られたように大衆団体としての側面を強く押し出した意見であった。

しかし8月においてコミンフォルムから日本共産党への評価が下されることになって再び事態は暗転した。コミンフォルムは所感派の路線を支持するということが明らかになり、再統一の方針は頓挫した。共産党主流派は以後、武装闘争方針を進めていく。以後、新日本文学会東京支部の仲介の甲斐なく、『人民文学』との分裂は続くことになった。¹⁵

2-1-3.第6回大会

『人民文学』との統一が遠のいてから後の1952年3月28日から30日にかけて新日本文学会第6回大会が行われた。この大会の意義として会が独自の運営を行い、『人民文学』との形式的和解¹⁶を達成したことが挙げられる。

『人民文学』からは編集委員会の名義で新日本文学会に対して大会開催を祝うメッセージが寄せられた。近年の国際および国内情勢を説き、この情勢を打破するための民主民族解放戦線として新日本文学会がその推進体となることを願うという期待が述べられていた。そのために本大会にて真剣な討論が行われ、かつ「新日本文学会の一部の人々との見解相違のために、『人民文学』を創刊した私たちも、会がこのような方向に発展する以上、従来の立場を清算し、提携と統一にむかって進む用意のあることを声明するものであります」¹⁷という分裂状態の収束をほのめかす内容が盛り込まれていた。しかし同時に大会直前の準備会に暴漢が乱入するという事件が置き、3月20日に一部の会員宛に大会の混乱を煽る檄文が送られていたことが大会二日目に発覚した。『人民文学』編集部による『新日本文学大会を前にして 一全国編集委員および地方の新日本文学会会員に告ぐ』¹⁸という文書は大会への出席者選出方式（規約には代議員選出とあったが、慣例として総会へは全員参加であった。しかし、『人民文学』が会費を納めないことによって会が混乱をきたしているために規約によって代議員方式とした）への不満と運動方針に見られる「セクト主義」への批判、「中野・窪川一派が会を私物化する傾向」の持ち主であって彼らを孤立させねばなら

ないという扇動を訴えていた。この二枚舌的な態度に対して武井昭夫の提案により代議員のみからなる調査委員会（斎藤清、窪田精、塚本雄作、井上光晴、稲葉宗夫、大崎栄太、武井昭夫）が中央委員会の圧倒的多数の賛成（81 対 21、棄権 5）をもって発足した。調査委員会は 1950 年 8 月の中央委員会の決定を踏まえて団体のあり方を強調し、『人民文学』への批判を行った。と同時に、矛盾した態度で臨んでくる『人民文学』に対して「この、第 6 回大会は、その進行中に印されたこのような汚点にもかかわらず、平和と独立のための、統一的方向にむかって正しく前進しつつある」¹⁹ として彼らを受け入れる姿勢を示すことにしたのである。第 6 回大会の結語においては、この大会が輝かしく、画期的なものであったことは「…過去二カ年間運動のなかに横たわりその発展をはばんでいたいくたの問題を、この大会において明らかにし、このことの確認の上にたって民主主義文学勢力の統一と結集の道をひらいた」点においてであると締めくくられている。²⁰

また組織運営の変更では中島委員長・中野書記長の体制を維持しつつ、それまでの百数十名の中央委員会を縮小して 75 人の新中央委員を選定した。そして閉会翌日の中央委員会において新常任中央委員は中島、中野に加えて岩藤雪夫、梅崎春生、岡本潤、小田切秀雄、菊池章一、金達寿、栗林農夫、久鬼高治、久保田正文、国分一太郎、佐々木基一、佐藤静夫、信夫澄子、霜多正次、西野辰吉、野間宏、花田清輝、本多秋五、水野明善の 21 人が選出された。窪川鶴次郎や壺井繁治、徳永直、渡辺順三といったプロレタリア文学運動の先輩格が後退し、清新な顔ぶれが混じる陣容となったのである。さらに 4 月からは中野重治にかわって花田清輝が編集長に就任した。

綱領・規約改正も行われて、まず規約改正において重要であるのは常任中央委員会の中から各機関の長を互選する方式から大会での直接選挙方式（委員長、書記長、会計監査、副委員長）に切り替えたこと（新規約第 14 条）である。また組織の役割も明確化され、常任委員会の下に書記局があり、書記局がそのもとに各機関を統括する方式が打ち出された（第 21 条）。このことは組織が外部からの圧力に耐える際に編集内容に自立性を保つ上で書記局（書記局長は中野重治）が強力な権限を持つ必要があったことを物語っている。

そしてさらに大きな変化は綱領の改正であった。新しく採択された綱領は以下のとおりである。²¹

- 一、あらゆる文学者・芸術家と提携して平和と民族独立のためにたたかう。
- 二、人民大衆の創造的・文学的エネルギーを昂揚、結集し、民主主義文学の創造と普及のためにたたかう。
- 三、文化・芸術の植民地化に反対し、民族の生活の真の文学的表現のために、また民族のすぐれた伝統の継承のためにたたかう。
- 四、基本的人権の完全な擁護と、言論・思想・集会・表現の徹底的な自由のためにたたかう。
- 五、戦争の挑発・宣伝と、各国・各民族間の文化交流の抑圧とに反対し、人類の平和・幸

福・文化の発展のためにたたかう。

会発足以来の綱領が第一に「民主主義的文学の創造とその普及」、第二に「人民大衆の創造的・文学的エネルギーの昂揚と結集」、第三に「反動的文学・文化との闘争」²²を掲げていたことと比較するとかつての第一項と第二項が結合して新規約第二項に押し下げられて、平和擁護と民族独立が第一線に上昇してきたことがわかる。

1950年前後の当時、占領下において平和裏に民主主義革命が進行しているという認識はもはや持ち得なかった。朝鮮半島で戦争が勃発し、国内での下山事件・三鷹事件・松川事件にみられる怪事件がおき、再軍備と単独講和への動きが加速する事態が生じていることは日本の独立と平和の問題を喚起させずにはおこななかった。新日本文学会が上の綱領改正を行ったのは1948年の平和宣言以来の流れの帰結である。第4回大会での「民族独立と平和擁護」が、結語に採られ、1950年8月の中央委員会方針では統一戦線方式が確認された。そして1951年の徳永栗栖提案への反論を踏まえて第6回大会の綱領改正に到達したのであった。

以上のようにして中島・中野を頂点に立てた新日本文学会はなんとか独自の運営を保ちつつ、大会運営を終了した。

2-2.第7回大会まで

2-2-1.増刷計画

第6回大会以後、常任中央委員会の決定により少数精鋭かつ大胆な編集を行う方針が定められたことを受けて編集局においては編集委員会が企画を立案し、編集部が実務執行するということになっていた。新たに『新日本文学』編集長に就任した花田清輝のもとでは編集委員会は花田のほかに水野明善、小原元、久保田正文の4名で構成されていた。加えて編集部には全学連の流れを汲む武井昭夫、檜山久雄、久保田千春らの若手が10月に参加することになった。また8月からは書記局には大西巨人が菊池章一とともに常任書記として参加していた。

1952年12月に緊急常任中央委員会が招集され、書記局からの提案により1953年初月号から雑誌ページ数を148ページから180ページに増やし、発行部数を3万部に拡大し、さらに機関紙拡大のために200万円の資金カンパを実施するという決定が下された。そして花田編集長の主導のもとで増頁・増刷・筆者拡大の路線が展開されることになった。²³

このような積極策が打ち出された背景には当時の会が抱えていた財政問題が横たわっていた。1948年以来、専門の文学者以外のサークル雑誌の書き手や「文化活動家」を大量に入会させる方針が継続されており、会員数は第5回大会時には約1500名、第6回大会の際

には約 1650 名にも増えていた。官憲の弾圧によるサークル活動の中断に加えて『人民文学』に参加した会員の消息が不明になり、会費の滞納が常習化していた。1953 年当初の会員は実際に連絡が取れるものが約 500 名、そのうちで会費を納入しているものは 100 名あまりという有様だった。²⁴ それゆえに第 6 回大会の大会報告はまず財政および組織の問題から切り出されるという事態となっていたのである。

しかし会の起死回生を狙った増刷計画は失敗に終わり、カンパも満足に集まることなく財政難をさらに深刻化させる結果に終わってしまった。²⁵ その後、組織は会の方針に対する混乱を收拾してから前進するべく、組織再編問題を中心に動いてゆくことになる。

2-2-2.再編・再組織問題

1953 年 2 月の中央委員会報告『この相対的停滞をやぶれ』²⁶ を経て、7 月に東京にて臨時中央委員会が開かれた。第 6 回大会において形式的に『人民文学』を受け入れる姿勢を見せたものの、組織がセクト主義に固まり、日本社会の現状に立ち遅れているという問題が提起された。かつての大衆動員路線で大量の会員を増加させた結果、組織の統率がとれなくなっていることから第 6 回大会の綱領を目標として結合した「このために働くことを義務として自覚した正しい意味での専門家組織」²⁷ に会を再編・再組織すること、そしてそれによって（『人民文学』のみならず）自身にある一切のセクト主義を清算することを決定した。

さらに常任中央委員の選出も行われて中野（書記長）、梅崎、菊池、金、国分、佐々木、信夫、西野、花田、本多（以上が留任）と秋山清、大西巨人、窪川鶴次郎、佐多稲子（以上が新任）たちが選ばれた。²⁸ 以後、常任中央委員であり常任書記も兼任する大西を中心として会の再編が進められることになった。会を立て直すにあたって『人民文学』発刊以来、連絡の途絶えていた者の消息を確認するべく調査カードが配信された。このカードへの回答によって会員の復帰の確認手段にしようとしたのである。後述するようにこの組織再編をめぐる大西と宮本顕治の間で対立が起きることになる。

調査カードの回答期限は当初、1953 年 11 月末になっていたが宮本の抗議によって翌年の 3 月末まで延長された。1953 年によせられた回答数は 350 名、翌年 3 月までには 480 名となった。²⁹ こうして 1954 年 4 月に中央委員会は会再編の経過報告『会再編の経過とその問題の理解について』を発表し、³⁰ 消息の確認できた 480 名に安部公房、足柄宏之、真鍋呉夫、木下順二、山室静、寺田透、山田晃らを含む新入会員 50 名を加えた合計 530 名による再編・再組織の進行を確認した。

この発表から 3 ヶ月後の 7 月の常任中央委員会において突然の花田編集長更迭事件が起こった。中野を除く常任中央委員 13 名のうち梅崎、本多、花田の 3 名が欠席している中で投票は行われて賛成 5（窪川、金、国分、信夫、西野）対反対 5（大西、菊池、秋山、佐多、佐々木）となった。そこに議長を務めていた書記長である中野が反対票を投じたのである。

31 この措置は議長権限とはいえ会規約からして異例のことだった。書記局は常任中央委員会の下部に位置しており、出席メンバーであっても票決権は認められていないのが慣例であったからである。なおこの事件によって編集部勤務だった武井や檜山、久保田らは抗議して辞職した。こうして花田に代わって中野が編集長に就任して翌年の第 7 回大会へと進むことになったのである。

2-2-3.大西・宮本論争

新日本文学会が『人民文学』との和解を進め、会組織を再編する流れと平行して大西巨人と宮本顕治との論争が起きていた。この対立の引き金となったのが会員の消息確認のためのアンケート調査であった。組織再編にあたってアンケートへの無回答者は会費未納または規約違反の理由で常任中央委員会の決定により除籍処分にするという措置が検討されていた。しかし宮本顕治は回答がなければ除籍にするという対応を機械的な手法であり「官僚主義的」とであると論難し、原則を定めて再編を進める中心人物の大西が「セクト主義」に文学運動を持っていこうとしていると批判した。³²

宮本の論難をうけて大西も『会本来の発展のために』と題する反論を翌月号に掲載、会の決定と原則に基づいて組織再編は進行しており、宮本の非難は正当性がないと応じた。続いて宮本も大西も 4 月号、5 月号に再び論文を発表して（1954 年 4 月号宮本『組織と批評の問題から (2)』、54 年 5 月号大西『青血は化して原上の草となるか』）二人の対立が高まりを見せたのだが、先述した 6 月号にて中央委員会からの組織再編の経過についての報告が出され、ここで大西と宮本の対立に判断が下された。声明では宮本の「会常任機関にセクト主義が存在する」という批判は誤りだという裁定が下された一方、大西に対しては「再組織方針へ宮本が異議申し立てをした場合、それを等閑視せず一事例として方針を具体化、発展すべき」という忠告がなされていた。この喧嘩両成敗に見える判定が発表されたのちの 7 月に花田編集長の更迭劇が起きたのである。

花田に代わって編集長（書記長兼任）となった中野は宮本の長大な論文『現実の課題にてらして』および続編の『あげしおに向かうために』を 9 月号と 10 月号とに続けて掲載した。一方、大西の反論は 1956 年まで掲載されることがなかった。宮本の「セクト主義」を排して会の大同団結へ向かおうという提言は第 7 回大会への布石をなすものだったのである。

花田編集長の更迭と大西への封じ込めという事件はより大きな文脈で見れば共産党の再統一に伴う宮本顕治の党中央への復帰および『人民文学』の新日本文学会への完全合流の最終的な仕上げであった。第 6 回大会以降、財政難に苦しみながらも会の再編が進められていた。中野重治が 1953 年 7 月の臨時中央委員会より述べた『われわれのなかの捨て置けぬ状態について』³³ で始めた「セクト主義」への批判の矛先は再編運動の中心にいた大西に 1954 年以降、集中していく。大西は常任中央委員のほかにも常任書記や財政委員責任者や

編集委員といった要職を兼任しており、花田と合わせて組織の財政を逼迫させた責任者とみなされやすい地位にいた。加えて花田の場合は宮本の西大批判の論文掲載に難色を示した³⁴ことが排除の一因となった。

また『人民文学』においては1953年秋以降に中心人物が野間宏に移り、1954年1月から『文学の友』に改題になった。『人民文学』若手の安部も新入会員として新日本文学会に入会し³⁵、新日本文学との合流は進行していった。

2-2-4. 第7回大会とその帰結、

第7回大会は1954年11月の中央委員会発表を経て、常任中央機関に潜むセクト主義の清算、会の狭隘化に結びついてきた規約改正を主内容として代理出席ではなく総会形式で翌年1月18日から21日にかけて行われた。この大会で50年問題に端を発した『人民文学』は新日本文学会に復帰することになり、完全な統一が達成されることになった。

発表のとおり規約改正が行われて中央委員会を幹事会、書記局を事務局に改称し、大会方式は代議員制から総会形式となった。1954年7月に組織改変によってかつては常任中央委員会の下に書記局、さらにはその下に諸機関を設置していたのが常任幹事会の下に機関が直属して設置され、書記局は機能縮小した庶務機関となった。³⁶ この名称を受け継いで組織の形が改正された。

常任幹事の改選で幹事会議長に中島、副議長として阿部知二、江口渙、蔵原惟人、椎名麟三、中野重治（事務局長兼任）、他に常任幹事として安部公房、植村諦、梅崎春生、小田切秀雄、岡本潤、金達寿、窪川鶴次郎、栗林農夫、国分一太郎、信夫澄子、壺井繁治、徳永直、西野辰吉、野間宏、平野謙、本多秋五（のちに辞任）、山下肇の計23名が選出された。新たに『人民文学』からは徳永、野間、安部が参加する一方で花田、大西、菊池、秋山らは排除され、また蔵原や壺井といったプロレタリア文学運動の古参の復帰が目立つ陣容となった。³⁷

総則改正によって会は自身を「みずからの創作、批評、研究によって平和擁護、民族解放、民主主義のために積極的に活動する文学者の自発的組織」と位置づけた。第一項は「人民大衆の文学創造力を結集して、民族の生活と理想とをたかめる文学作品を創造・普及し、平和擁護、民族解放、民主主義の達成のために活動する」と定めており、かつての「民主主義文学」の文言を削除し、かつ「たたかう」組織から「活動する」組織に鞍替えした。³⁸ 会員数はこのとき684名、中野は中島に編集長を引き継いで新体制の発足となったのである。

こうして第7回大会において50年問題に端を発した分裂事件は収束した。世界的には1953年にスターリン死去、朝鮮戦争の休戦協定成立を経て世界秩序は沈静化に向かいつつあった。1955年7月に第6回全国協議会によって日本共産党はかつての「極左冒険主義」を批判し、野坂に宮本が合流して党は再統一を完成する。同年に左右に分裂していた日本

社会党が合同し、これに対抗して保守政党の自由党と民主党も合同して自由民主党を結成、ここにいわゆる 55 年体制が始まることとなった。

共産党の分裂によって組織に深刻な事態を持ち込まれ、大会進行においてまで共産党に引きずり回された一方で、新日本文学会は文学者の自発的な文学創造のための組織という自己規定を勝ち取るにいたった。共産党の問題収束と前後して会の長らくの問題も一段落ついたのであった。

2-3.50 年代後半

2-3-1.新しい動き

第 7 回大会にいたるまでが組織が揺さぶりに耐えた時代であったとすれば 50 年代の後半は組織への問い直しが出現した時代であった。1955 年の日本共産党の第 6 回全国協議会、1956 年のソ連でのスターリン批判という情勢の変化の中で自立的な団体という枠に収まることへの違和感がきしみとなって露呈したといえよう。それが吉本隆明と武井昭夫を中心に唱えられたプロレタリア文学の戦争責任問題であり、第 8 回大会前後に出現した各種の流派と会のあり方をめぐる組織論であった。60 年代における共産党との絶縁に関する問題点はここに胚胎していた。

吉本・武井によって展開された批判は戦後の民主主義文学運動への問いかけであった。会員である武井氏は筆者のインタビューに対して以下のように回答している。

文学者の戦争責任の問題を文学運動の本格的創造活動として進めていこうとすれば戦争との関係における文学者の荒廃した意識をもう一度自己批判し、反省してそれをどう克服するかを文学の変革の課題、つまり自己変革、自分をも変革の対象として考える運動を起さなきゃならない、という主張ですね。そういうものは一応すべてに受け入れられるわけなんてことはありえないのですけど一応建前としてこれを受け入れるという方向をとっていくのが 50 年代後半から 60 年代の初期にかけてです。39

自己変革としての組織のあり方が多様な芸術運動の形式を生むことにもつながっていった。1957 年 3 月には井上光晴・奥野健男・清岡卓行・武井昭夫・吉本隆明（吉本以外は会員）によって『現代批評の会』が結成され、また 5 月には花田清輝・佐々木基一・野間宏・長谷川四郎・安部公房・針生一郎・埴谷雄高その他の同人（埴谷以外は会員）によって『記録芸術の会』が発足した。さらに 10 月の第 8 回大会をはさんで金達寿・西野辰吉・霜多正次らを中心にリアリズムの探求を旗印とする『リアリズム研究会』が発足になった。401957 年の『新日本文学』には文学運動の組織をめぐる論文が多数掲載され、こうした動きのも

とで10月に第8回大会が行われることになったのである。

2-3-2.第8回大会

第8回大会の意義は先述した新たに会員内部から派生してきた流派への肯定的な評価が現れた点にある。大会の報告を担当したのは中野と小田切である。まず中野は『日本文学の現状とわれわれの任務』という報告書において新日本文学会がおかれている問題を指摘した。戦後から10年以上が経過し、「もはや戦後ではない」という雰囲気は瀰漫しつつある現在、日本文学はマスコミュニケーションの発達に合わせて繁栄すると同時にそれゆえに停滞している。大衆との距離が開く状況において彼らと会の結びつきを強めるためには直接的な接触のみならず間接的に影響を与えていくことが不可欠になる。それゆえに会から自発的に派生する流派にも肯定的な視線が向けられねばならなくなるのである。

こうして中野は報告で「会の組織はあくまでも文学活動の現場に置かれねばならない。そのためには、会は特に精力的に現在のさまざまな文学グループ、流派を知り、研究し、そこと連絡し、そこから具体的に学んでこななければならない」と運動における提案を行ったのである。⁴¹そして小田切による組織報告は「新しい協同の方式をつくりだすために！」という副題のとおり運動の停滞が組織の構成や運営方式によってもたらされているという認識に基づき、変革を提唱するものだった。会へは個人加盟が原則であると前置きしつつも流派の活動を容認し、さらには地方支部制度の見直しを訴えたのである。会の規約には一定の地域に会員3名以上がいれば支部の結成が可能であるという規定があった(第11条)のだが、かつて組織拡大に用いられた回路がいまや機能不全に陥っているのがよいとすする指摘が出現したのは画期的であった。

幹事選出方法は全会員の50名連記の投票方式で行われた。⁴¹名の幹事選出(2名が辞退)の結果、幹事会議長に中島、副議長に中野と平野、そして他の常任幹事として安部、小田切、大西、金、蔵原、窪川、国分、佐多、佐々木、霜多、壺井、西野、野間、長谷川が選出されることになった。また編集部も中島を委員長、小田切を副議長、そして大西、武井、安部、佐々木、長谷川、野間、関根、本多、久保田、西野という人員が選出された。1955年の規約改正で書記局の相対的地位の低下および機能縮小とそれに伴う編集部の相対的上昇を考えると編集委員会に流派活動を展開したものが参加することになったのは会組織の刷新が進行するのに少なからぬ影響力があったといえよう。

2-3-3.第9回大会そして安保闘争へ

第8回大会以降も組織のあり方をめぐる議論は続いた。特に会の内外に反響を呼んだのが会の外から寄せられた竹内好による『新日本文学会への提案』であった。⁴² 会は文学運動の主体ではなく、文学運動を自由にするための組織でなければならず、そのためには第一に解散、できなければ緩やかな連帯組織に改組すべきという提言が行われたのである。

改組論が出現してのちの1959年11月1日から3日にかけて第9回大会が決行された。この大会にて前大会で指摘された地方支部の廃止が決定となった。規約改正も行われて会は「われわれは、おのおのの文学活動によって、人類の平和を守り、民族の完全な自立と発展とをうながし、民主主義を発展的に確立するとともに、新日本文学会に集まって、積極的に共同する」(総則) 団体と自己を位置づけた。大会報告としては「あらゆるエコール、グループ、個人の文学活動、さまざまな方法、様式、傾向の存分な開花を激励しつつ、それらの製作者たちのために創造実現の気運と場所とを用意しつつ、相互の競争のうちに、これらを進歩的大衆文学の結実という共通の目標におし進める任務を持つ」という専門文学者の全国的な統一組織という自己規定が確認された。⁴³ 大会後の常任幹事会で幹事会議長に中島、副議長に阿部、中野のほかには常任幹事として安部、井上、大西、久保田、国分、佐々木、佐多、椎名、武井、竹内実、壺井、野間、花田、針生の17名が選出され、編集委員会は大西を長として武井、花田、針生、井上、久保田の6名が就任した。かつて1950年前半の激動の帰結として左遷されたもの達が編集委員会に返り咲くことになり、会の実質的な運営が旧プロレタリア系の作家から移りつつあることを感じさせる人事となった。

その当時1957年には岸信介内閣が成立しており、1950年代末には日米安全保障条約改訂が重大な問題として浮上していた。大会は安保条約改訂反対の宣言を発表して幕を閉じる。激動に見舞われた50年代は組織のあり方をめぐる議論で沸騰し、団体は安保闘争に向かっていった。

2-4.章末注釈

- 1、窪田精『文学運動のなかで』145ページ
- 2、中島健蔵『回想の戦後文学』243ページ
- 3、中島前掲書、252ページ
- 4、『新日本文学』51年1月号84ページ
- 5、『新日本文学』1951年2月号109ページ
- 6、窪田前掲書64ページおよび『新日本文学』1949年10号における規約14条より「中央委員会議長は中央委員会においてこれを互選する」とある。当時は常任委員会において常任委員の中から議長、書記長を互選していた。
- 7、中島前掲書、262ページ
- 8、『新日本文学』1951年4月号126ページ
- 9、『新日本文学』1951年4月号129ページ
- 10、本多秋五『物語戦後文学史 中巻』186ページ
- 11、『新日本文学』1951年5月号74ページ、6月号5ページ、9月号50ページ
- 12、『新日本文学』51年4月号6ページ、6月号4ページ
- 13、菊池章一『組織と人間と方法』、鎌田編集『「新日本文学」の60年』より

- 14、『新日本文学』1951年8月号111ページ
- 15、窪田前掲書174ページ
- 16、『人民文学』は1953年11・12月合併号で終刊、『文学の友』と改題して1954年1月から発行された。さらに『生活と文学』と改題し、1955年2月に新日本文学会を発行所とした。1957年3月に『新日本文学』に吸収・合併となる。
- 17、『日本文学当面の諸問題』104ページ
- 18、『日本文学当面の諸問題』100ページ
- 19、『日本文学当面の諸問題』100ページ
- 20、『日本文学当面の諸問題』103ページ
- 21、『日本文学当面の諸問題』101ページ
- 22、『新日本文学』1949年第10号、94ページ)
- 23、花田のもとで若い書き手として奥野健男、清岡卓行、武井昭夫、針生一郎、檜山久夫らが新たに誌面に登場した。また「3万部増刷」の実際は約5千部から1万2千部に増やした程度だった(窪田)。結果として「(1953年)1月号から4月号に亘る実収平均三割弱」(『文学新聞』1953年10月20日)という財政危機に終わった。
- 24、窪田前掲書344ページ
- 25、『新日本文学』1953年10号における臨時中央委員会・中野の報告によると200万円募金運動は3月の締め切りを延長しても5月末までで63万7千円しか集まらなかったという。
- 26、『新日本文学』1953年6月号75ページ
- 27、『新日本文学』1953年8月号から『扉を一ぱいに開け』
- 28、窪田精前掲書336ページ
- 29、窪田前掲書348ページ
- 30、『新日本文学』1954年6月号74ページ
- 31、武井昭夫『批評とアヴァンギャルド』371ページ
- 32、『新日本文学』1954年3月号より『組織と批評の問題から』
- 33、『新日本文学』1953年10月号6ページ)
- 34、武井前掲書370ページ
- 35、『新日本文学』1954年6月号74ページ
- 36、窪田前掲書371ページ、381ページ
- 37、『文学運動における創造と批評』38ページ
- 38、『日本文学の現状と方向』221ページ
- 39、筆者は2月において武井氏にインタビューを行った。
- 40、現代批評の会は1959年11月に、記録芸術の会は1961年12月に解散した。
- 41、『新日本文学』1958年2月号106ページ
- 42、『新日本文学』1959年6月号102ページ
- 43、『新日本文学』1960年3月号101ページ

訴える」を發表した。8その結果、翌年までに安部公房や野間宏、武井昭夫といった黨員文学者は共産党から除名されることになった。

こうして新日本文学会と共産党との溝が深まりつつある中で12月の第10回大会が行われたのだった。この大会の意義として中野および野間の報告によって組織の体質と「政治と文学」の關係に理論的定式を与えることを達成した点である。

中野は文学者および文学運動組織が主体的な責任をいかにとるかということで以下のよう結論した。「文学と文学者とは、対立する支配権力と人民との關係においては人民の側に立つ。これはわかり切ったことである。権力側の攻撃と人民の側の防衛・反撃との全關係において、文学は科学の助けをもちつつ、しかもそこにヒューマニティを追跡する文学者独自の判断を持ち、これを創造および批評として提出する。文学・文学者・文学運動組織が、人民の活動、特にその精神状況にたいして独自に直接に責任を取るのである。あらゆる政治的、社会的、職業的諸組織などと、文学運動組織は、人民に対して独自に直接に責任を取ることに於いて平等の關係に立つ」9また野間は安保闘争以後、日本で独占資本の支配強化が進み、それへの反対運動がおきる状況を見据えつつ「これまでのプロレタリア運動とプロレタリア文学運動時代、共産党とそれに所属する文学者およびシンパとしての文学者によって採用された、いわゆる「芸術に対する政治の優位性」という理論の誤りが明らかにされ、その裏返しとしての政治と文学の二律背反という戦後提出された主張もはやその力を失うにいたっている」10と評した。それゆえに文学者が主体を確立して会を専門文学者の団体として確立せねばならないと訴えるにいたったのである。

発足以来、共産党という媒介がなんらかの形で引っかかってきた団体にとってこの総括は理論的にはもはや党の政治に従属することなく、主体的に動くことが可能であると定式化したことを意味するといえよう。

3-2. 決別の第11回大会へ

第10回大会の決定は共産党との確執をさらに激化させることになった。大会において1950年以来組織の顔役を務めてきた中島健蔵幹事会（旧中央委員会）議長が退任、後任は無党派出身の阿部知二が就任（1966年の第12回大会で花田に交代）した。同じく1949年以来、事務局（旧書記局）長に就任してきた中野重治（非常勤）も武井昭夫（常勤）にその地位を譲った。

常任幹事会には阿部（議長）、佐々木（副）、中野（副）、他に常任幹事として大西、針生、井上、花田、野間、小林、竹内、長谷川、小林、佐多、久保田、小田切、国分の17名が選出（1962年に小田切、小林、竹内は幹事解任となり、かわって檜山、菅原、江川卓が入った）され、その他の役職にも共産党への声明に名を連ねたものが多数就任し、共産党との距離が開いたことを感じさせる人員配置となった。11 無党派の中島に続いて阿部が顔役に座ったのは本人が語るによれば新日本文学会の混乱をこれ以上、加熱させることな

く歯止めを利かせねばならないということらしいが、12 共産党の憤激を買うのが必至となるような方向に会が進んでいたのである。

このようにして新日本文学会と共産党の対立が頂点に達した出来事が 1964 年 3 月 27 日から 29 日までの 3 日間にわたる第 11 回大会であった。もはやこの段階において共産党との和解はありえず、それが証拠に大会報告が大会事前の 1964 年 3 月号に掲載されるという異例の出来事が起きた。武井の起草による一般報告草案『今日における文学運動の課題と方向』が事前に提出されるということは、大会においてこの方針を可決し、組織の純化・結合を強める決意が会の中心部にあったことを意味する。3 月 12 日における全会員への常任幹事会からの参加の訴え¹³を経て未曾有の出席者（会員数 451 名、出席資格者 359 名のうち役員投票において 201 人が参加）を動員した第 11 回大会が行われることになった。

会議は役員の選出や規約改正、一般報告の内容をめぐる紛糾した。大会終了にあたって「大会の準備過程および大会の討議においてあらわれたところの、会内の非文学的要素の克服・排除について、幹事会が今後の会運営において適切な処置をとること」を要望する動議が提出されたのにあたって議長団・運営委員会が動議ではなく、趣旨として三日にわたる討議が明らかにしたとして提案、大会はこれを承認した。「非文学的要素」について今大会に会員として初めて出席した政治学者の藤田省三は以下のように回想する。「…「干渉本部」派遣かどうか知らないが、全くでまかせ放題のボイシング・マシーンの一群が居て…（略）第一、マシーンとして壊れていた。発声と発声の間に規則性がないのである。「議長議長議長発言」と大声で怒鳴りながら発言を要求して立ち止まったまではよかったが立ち上がって見たら言うことがないので「考えてから発言する」などとボソリと呟いて坐ったことが確か一回には止らなかった」。¹⁴

会議をめぐる共産党との対立はここで絶頂に達し、ついに共産党との縁が切れた。会は新規約を採用し、会を「進歩的・大衆的な文学芸術創造運動のための専門文学者の団体」、そこに集う会員は「専門的な創造研究活動をしている者」と規定した。¹⁵ 新たな常任幹事は阿部（議長）、佐々木（副）、野間（副）、武井（事務）、他に幹事として大西、檜山、小林祥一郎、針生、中園英助、竹内実、中野重治、久保田、いいたもも、井上、菅原、長谷川、小林勝の 17 名が選出され、編集委員は針生を長として武井、安部、小林（祥）、久保田、井上、木島、松本、小野、笠が就任した。第 10 回大会における理論的達成は第 11 回大会によって実質的に完了し、新日本文学会の創設の際に蔵原によって提示された「一定の指導」は消滅した。

3-3. 「自立」のあとで

共産党との絶縁になった第 11 回大会以後、幹事会内部に設けられた整理委員会によって清算と事後処理が行われた。先の規約改正によって団体がもはや「平和、民族独立」のための組織ではなく文学創造のためにあること、そして会員が団体を媒介とせずに個人で加

入するということが会の基調となったのである。そこから派生する問題として緩やかで寛容な組織でありながら、会の分裂は容認せずという一線を設けるために会内での民主的ルール確立が重要視されるようになった。その際に先の大会で一般報告に意義を唱えた共産党系作家の江口渥、霜多正次、西野辰吉ら元幹事に対する処分が検討された。

新日本文学会は10月に江口、霜多、西野、津田孝らを除名処分にした。西野や霜多らは1957年に結成したリアリズム研究会の流れを汲んでおり、彼らが1965年に日本民主主義文学同盟16を結成し、新日本文学会から分裂していった。

新日本文学会は結成から約20年を経てようやく完全に独立した。試練を乗り越えて新たに踏み出した1966年の第12回大会では「一流派でもなく、さまざまなグループ・流派の協議体でもなく、反体制運動を担う（政治的に）民主的な文学者の結集体でもない」会員が文学創造を通じて全人民に働きかける仕事を中心任務とする文学運動団体17と位置づけた。しかし今までにぶつかったレッテルを全て否定して到達した地点からの展望は決して明るいものではなかった。第11回大会時に451名いた会員は今大会において360名にまで減少した。18脱会した39名は民主主義文学同盟に参加していった者である。発行部数も減少傾向にあった。

文学の自立と自律を勝ち取った新日本文学会は以後、衰退の一途をたどった。60年代はベトナム戦争の深刻化に当たって「ベ平連」（「ベトナムに平和を！」市民連合）のような市民団体が出現し、また学生運動が広まっていた。こうした日本社会の動きに対して会の中央は決して好意的であったわけではなかった。

1966年の幹事会報告においてベ平連に対して「自己の役割の思想的な意味、自己の運動の現政治状況下における位置を客観化し、全体の成功のために力をつくすという精神と方法とが、この出現したばかりの市民運動にはまだ十分には成立していませんでした」19とその社会的な意義については冷めた評価を与えている。ベトナム反戦運動の中心人物だった小田実は座談会において「デモが決まって、右翼も左翼もいろいろ集まったけど、「新日本文学」などのオーソドックスな左翼団体は、最初の集会で「こんなインチキがあるか」と言って帰っていったよ」と回想している。20

会は新しく社会運動として生成してきた市民運動や学生運動にうまく結合できなかった。米国原子力空母エンタープライズの佐世保寄港反対運動にかかわった学生たちに対して「学生たちの反戦行動は意識的にせよ、無意識的にせよ、本来たちあがるべき労働者階級への要請の先取りによって行われたものとして、われわれはこれを支持する。…あくまで階級的な視点の貫徹を軸として、革命の主力部隊たる労働者階級の反戦闘争の発展のために、われわれのあらゆるたたかいを結集する方法の探究に向かわなければならない」21と評価する。あくまで社会変革の主体は「労働者」であって、その認識は安保闘争を経ても大きく変わることはなかったのである。

3-4.インタビュー

筆者は2006年2月6日に武井昭夫氏に会見し、インタビューを行った。氏は1927年に生まれ、1947年に新日本文学会に入会、1970年に退会した。全学連の議長を務めた経験もある。武井氏へのインタビューから質疑応答をいくつか抜粋する。

質問：運動として新日本文学会を見た場合、60年代が転換点となっているのではないかと
思うのですがいかがでしょう？

武井：60年代もあるけどね、僕が20代のころかな。大学に入ったのが1947年ですね、47年の春に新日本文学会に入りましてね。50年代の3~4年から『新日本文学』に編集の仕事や書いたりして関わって来たから、50年代も一つの転換点だったと思うんですね。それから60年代と安保闘争、70年に入るところにまだ会員ではあったのですが、しばらくして会を辞めまして。時代のそれぞれに対応してきているということもあるのですが…僕はやっぱり、まず中野重治さんを一人がどうこうというわけではないけど、中野さんが存在されていたということが新日本文学会の戦後の運動にとってひとつの重要な柱になっていたと思う。中野さんがなくなられた（1979年）あとに運動は基本的に終焉すると思いますけどね。もう一人あげれば74年になくなった花田（清輝）さん。これが戦後の新日本文学会の運動が、現実には日本の持つ広い文学世界全体に対して、反対するにしろ賛成するにしろ一つの運動体としての文学の理念が対立のほうじゃなく、一定の影響を与えていたという時代であったと思う。

質問：個人的営為である創作活動において集団を形成することは何を意味するのですか？

武井：集団を形成すること自体に意味があるんじゃないじゃなくて文学の変革というものを社会の、つまり人間全体、共同で生きている同時代の人間全体の生き方や考え方や結び合いながら文学の内容を変革していく。そういう仕事をやっていくことは一人でも出来なくはない。しかし同じ志、共通する志（全く同じ志なんかありやしないが）を持っている人たちがお互いに助け合ったり批判し合ったりしていくことが非常に状況との関係においても創作力を発展させていく上でも重要な意義があるわけですね。それから先ほど言いましたように同時代の読者と一緒に交流し、批判し合いながら成長していく。

だから共同でやるのは助け合いばかりじゃないわけですよ。間違いがあつたり足りないところがあつたら批判し合ったり、それから教え合ったり…それから共同の課題を研究していくことは非常に意味があるんであって、私も若いころ吉本（隆明）さんと奥野（健男）さんと知り合ったり、ときには喧嘩もしましたし、いろいろありましたけれど、それはその後の自分の仕事をしていく上で支えになるわけですよ。だからそういう点では個人

の営為である文学を創作していく、あるいは文学の批評性を広く高めていくっていうことは単なる個人の営為に委ねられるものじゃなくて、そういう人たちの相互批判と共同の組織化というのが非常に重要です。それが社会全体に影響を及ぼしていくという外延的なことだけではなく自分自身の批評力と想像力を持続し高めていくという、そういう意味で集団化というのが非常に大事じゃないかと思うのです。

質問：60年代に共産党と絶縁して全く新しい団体になったとき、このまま自己の安住してしまう危機があるとおっしゃいましたが、ここでどうして会は新しい方向に出られなかったのでしょうか？

武井：高度成長が50年代に作り出してきたものをほとんど吸収していく傾向が強まってきていたんですね。それに対する抵抗闘争が新しく構想されていかなきゃいけない。ところが構造改革論というのは社会的な志向を非常に安易に新しい転換が可能ないように幻想するんですね。だから欲望がどんどん充足していくことに対しての危機感というのがなくなっちゃうんですね。非常に恐ろしいことです。だから戦前の日本資本主義は天皇制のもとで非常な強圧権力を振るって収奪をしながら力で押さえつけていく、したがってそれと戦わざるをえないし、戦いたっていう力が民主運動の中に生まれていきます。また知識人の運動あるいは労働者、働く人の中の知的な部分に共同のプロレタリア文化運動というもの、つまり革命運動を生み出してくる必然性みたいなものがあつたと思うんですね。その権力が倒されたのであまりに圧迫されていたものが取り除かれたからそこへ向かって盛り上がったんですが。それが僕はある意味でいえば60年代の反安保闘争に、日米安保条約の締結によってできる新しい支配体制ですね、それへの戦いの中に表現されていると思うんです。体制側のほうは55年体制といって5年前にそういうことを予測して計画を始めるわけですけど。そのあとにオリンピックや万博なんてやりながら高度成長政策をやる。偶然そうだったんじゃなくて計画的にそうだったんですけど世界の資本主義の中でも非常に成功していく。その持つ思想的精神的な危機を、いろんな文学運動に引き起こしていく危機感が非常に失われていった。ただ『新日本文学』の場合、従来の共産党の政治指導、よくいえば指導、悪く言えば支配、そういうものを引きずることによって人民運動と対応関係を持っていたある物質的力から独立する。独立したら自分で作り上げていかなければいけないわけですよ。それはものすごく大変なことなんだ。その状況を見抜いて対抗していかなきゃいけないんですけど、さっきその一部について言いましたように運動の内部においても、千田是也のように自分の好きな俳優を引き抜いて西武資本に走り、そこで好きなようにやる。だいたい好きなようにやれるって考えが間違っているんですけどね。それは『新日本文学』だけじゃなくて全体がそうなる。そう思いますね。だからその後にくっってくるんですけど十年二十年あとに出てくる。労働運動でいえば総評が解体される。連合が成立する。そういう基盤が60年代の後半から60年代末にかけて出来上がってしま

う。

質問：少なくともよいから会費を納めるのが自主運営の基本とおっしゃいましたが、「代表なくして課税なし」という言葉がありますが民主主義というのはこういうことですか？

武井：つまらないことのようにだけど大事なこと。今、民主主義って馬鹿にされているけどね。民主主義を本当に自分たちの共同の考え方として定着させる、それを単なる考え方じゃなく実際にルールとして作ってみんなで守っていく。支配階級が秩序を上から押し付けていくときにはいろいろなことやらされる。歩調をそろえて歩くことまでやらされちゃうわけですよ。鉄砲もって殺していけっていわれたら殺すぐらいのことはやらされる。でも大事なことは自分たちで下から作る、自分たち同士で作る事実なんですね。それが民主主義だと思うんですよ。ブレヒトなんているでしょ。言葉の問題一つとってみてもそれを規律とみるか、上から来る秩序と自分たちが自分で下から作り上げていく規律、自覚だね。そういうものを区別して考えられるような人間が国民レベルについていえば国民でなきゃならないし、労働者でいえば労働者階級。それをどうやって作るかなんですよ。

3-5. 結論

「政治と文学」、それは新日本文学会にとって創立以来の戦いであった。40年代は「民主主義文学」の定義が「政治」によって狭められるか否かの戦いの時代であった。次に来た50年代は「政治」がむき出しの形で会の内部に介入をかけてきた時代であった。そして50年代の激動と揺り戻しの後の60年代によく「政治と文学」との葛藤に終止符を打つことができた。発足以来20年に及ぶ闘争は大きな犠牲を払い、会はずいに文学の「自立」と「自律」を獲得するに至ったのである。

しかし勝利と同時に衰退の兆しもそこに胚胎していた。共産党という組織を脅かす、組織の母体でもあった政党との確執、換言すれば「政治の優位」に屈するか、それとも「政治」を「文学」として止揚するのかという対立は60年代の半ばにもはや古い対立軸となっていた。共産党や新日本文学会にかわり、市民運動や学生運動が台頭し、新たな「政治」への回路が「市民」（「労働者」ではなく）に開けていた。

1970年以降、武井や大西は組織を脱退。また会の発足以来、その理念に関わってきた中野重治は1979年に死んだ。会は低迷を続けたのちの2003年の第46回総会にて「新日本文学会を二年後をめどに解散する」という決定が下る。2004年に雑誌『新日本文学』は廃刊、翌年3月に会は解散となった。長い闘争の末に組織の自律を勝ち取った団体は「自主解散」という形で自身の60年に及ぶ歴史に幕を閉じたのであった。

新日本文学会が戦ってきたものが「政治と文学」であったのなら新日本文学会が衰退していったのも「政治と文学」であった。「政治」つまり「共産党が革命に従属物を指導す

る」政治との戦いに新日本文学会は自立という勝利を手にした。しかしそれは小状況での勝利というべきものである。勝利に至った 60 年代は既存の対立が消滅し、高度経済成長のもとで大衆社会化が進行していた。革新陣営内部の紛糾という小状況をよそに保守政党の優位はいよいよ確かなものになり、資本主義体制は磐石の重みを持ってその支配力を拡大していった。確かに新日本文学会は（共産党の）「政治と文学」という小状況において勝利者となった。しかしそうであると同時に（保守政党優位、資本主義体制安定という）大状況、つまり日本社会に巣食う「政治と文学」に呑み込まれたのであった。

3-6.章末注釈

- 1、『新日本文学』1959年8月号106ページ
- 2、『新日本文学』1960年3月号102ページ
- 3、『新日本文学』1960年3月号6ページ
- 4、『新日本文学』1960年7月号22ページ
- 5、『新日本文学』1960年8月号5ページ
- 6、『新日本文学』1960年10月号5ページ
- 7、思想の科学研究会編『共同研究 転向（下）』329ページ
- 8、第一の声明に名を連ねているのは安部公房、泉大八、大西巨人、岡本潤、且原純夫、黒田喜夫、栗原幸夫、小林祥一郎、小林勝、菅原克己、武井昭夫、竹内実、玉井五一、中野秀人、野間宏、花田清輝、濱田知章、針生一郎、広末保、檜山久夫、柁木恭介の21名。第二の声明に新たに加わるのが石田郁夫、岡田憲一、木原啓充、杉浦明平、関根弘、羽山英作、丸山静の7名である。
- 9、『新日本文学』1962年3月号98ページ
- 10、『新日本文学』1962年3月号112ページ
- 11、窪田精『文学運動のなかで』467ページ
- 12、窪田前掲書467ページ
- 13、1964年『新日本文学通信』23
- 14、鎌田編『「新日本文学」の60年』より藤田省三『原初的條件』
- 15、『新日本文学』1964年6月号169ページ
- 16、現在は日本民主主義文学会と改称。機関紙『民主文学』を発行している。なお西野辰吉、金達寿、霜多正次ら会に流れていった文学者は彼ら自身が共産党から離れるとともにこの団体からも去っていった。
- 17、新日本文学会編『文学運動における創造と批評』より佐々木基一「幹事会報告」
- 18、新日本文学会前掲書、218ページ
- 19、新日本文学会前掲書、209ページ
- 20、井上・小森編著『座談会昭和文学史』294ページ
- 21、『新日本文学』1968年3月号161ページ

3-7.参考文献

- 秋山清 『文学の自己批判』(新興出版社、1956年)
- 井上ひさし、小森陽一編著『座談会 昭和文学史一』(集英社、2003年)
- 井上ひさし、小森陽一編著『座談会 昭和文学史四』(集英社、2003年)
- 井上ひさし、小森陽一編著『座談会 昭和文学史五』(集英社、2004年)
- 井上ひさし、小森陽一編著『座談会 昭和文学史六』(集英社、2004年)
- 小熊英二 『清水幾太郎』(お茶の水書房、2003年)
- 小熊英二 『〈民主〉と〈愛国〉』(新曜社、2002年)
- 小田切進編 『日本近代文学年表』(小学館、1993年)
- 加藤周一対話集第3巻 『〈国民的記憶〉を問う』(かもがわ出版、2000年)
- 鎌田慧編集代表 『「新日本文学」の60年』(七つ森書館、2005年)
- 窪田精 『文学運動のなかで』(光和堂、1978年)
- 久野収・鶴見俊輔・藤田省三 『戦後日本の思想』(講談社、1976年)
- 榊原昭二 『昭和語』(朝日新聞社、1986年)
- 思想の科学研究会編 『共同研究 転向 上巻』(平凡社、1959年)
- 思想の科学研究会編 『共同研究 転向 中巻』(平凡社、1960年)
- 思想の科学研究会編 『共同研究 転向 下巻』(平凡社、1962年)
- 新日本文学会編 『文学運動における創造と批評』(芳賀書店、1966年)
- 新日本文学会編 『民主主義文学運動 1948年』(新日本文学会、1948年)
- 新日本文学会編 『日本文学の現状と方向』(河出書房、1955年)
- 新日本文学会編 『日本文学当面の諸問題』(新日本文学会、1952年)
- 武井昭夫批評集1 『戦後文学とアヴァンギャルド』(未来社、1975年)
- 武井昭夫 『創造運動の論理』(晶文社、1963年)
- 武井昭夫 『批評の復権』(晶文社、1967年)
- 竹内好評論集第二巻 『新編 日本イデオロギイ』(筑摩書房、1966年)
- 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二 『戦争が遺したもの』(新曜社、2004年)
- 田所泉 『「新日本文学」の運動 歴史と現在』(新日本文学会出版部、1980年)
- 現代日本文学大系『中野重治・佐多稲子集』(筑摩書房、1970年)
- 中野重治全集 『第27巻』(筑摩書房、1979年)
- 中島健蔵 『回想の戦後文学』(平凡社、1979年)
- 西野辰吉 『戦後文学覚え書』(三一書房、1971年)
- 日本共産党中央委員会 『日本共産党の八十年』(日本共産党中央委員会出版局、2003年)
- 本多秋五 『物語 戦後文学史(上)』(岩波書店、2005年)
- 本多秋五 『物語 戦後文学史(中)』(岩波書店、2005年)
- 本多秋五 『物語 戦後文学史(下)』(岩波書店、2005年)

『丸山眞男座談第5冊』(岩波書店、1998年)

吉本隆明 『藝術的抵抗と挫折』(未来社、1963年)

復刻縮刷版『新日本文学』(第三書館、1993年)